

氏名	土川 睦子	(学籍番号 18DN03)
学位の種類	博士(看護学)	
学位記番号	31号	
学位授与年月日	2024年3月7日	
論文題目	成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感を軽減するための対処法を促進する協働的パートナーシップによる看護介入プログラムの作成と評価	
論文審査担当者	委員長	大石 ふみ子 教授
	委員	市江 和子 教授
	委員	三輪 眞知子 教授
	委員	藤浪 千種 教授
	委員	新宮 尚人 教授

## 論文要旨

### I. 研究背景

糖尿病患者は食事、運動、薬などの多くの自己管理が必要である。糖尿病に関連する心理糖尿病による心理的負担感を感じている患者は、2型糖尿病で36%、1型糖尿病で42.1%に上る。この心理的負担感が持続すると、孤独感や不安が生じ、うつ状態や摂食障害などが引き起こされ、最終的には血糖コントロールが悪化することが報告されている。特に、成人期発症1型糖尿病患者は、家族や医療者に相談したいと思いつながら、仕事との両立に悩む療養生活を送り、社会的認知度が低く、心理的負担感に対する支援が不足していると推測される。本研究では、成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感を軽減する支援プログラムの作成が必要と考えた。

### II. 研究目的

研究全体の目的は、成人期発症1型糖尿病患者が、心理的負担感をもたらす理由に対処法を獲得し、心理的負担感を軽減するための「協働的パートナーシップによる看護介入プログラム」を作成する。このプログラムを成人期発症1型糖尿病患者に実施し、その効果を評価することである。目標は以下の通りである。

- 予備研究：成人期発症1型糖尿病患者の療養体験を明らかにする。
- 本研究：成人期発症1型糖尿病患者の療養体験から明らかになった心理的負担感をもたらす理由と、文献検討から、心理的負担感を軽減するための「成人期発症1型糖尿病患者の協働的パートナーシップによる看護介入プログラム」を作成する。

その看護介入プログラムを成人期発症1型糖尿病患者に実施し、その効果を評価する。

### III. 研究方法

#### 1. 予備研究：質的記述研究

成人期発症1型糖尿病患者9名に半構成的面接と、自記式質問紙調査を行った。成人期発症1型糖尿病患者に、1型糖尿病を発症したときの気持ち、療養生活における苦勞、周囲の人との関わり方などの療養体験について調査した。

## 2. 本研究：事例介入研究

予備研究と文献的考察をもとに、看護介入プログラムを作成した。作成した看護介入プログラムを、1型糖尿病を発症してから5年未満で、かつ満20歳以上59歳未満の成人期発症1型糖尿病患者に適用し、その効果を評価する。分析方法は、PAID および WHO-5-J の合計得点看護介入プログラム開始前と終了時で比較した。面接で得られた1型糖尿病患者の心理的負担感の受け止めや、対処法のデータは、質的帰納的に分析した。看護介入プログラム内容についての評価は、対象者から得た質的データを質的帰納的に分析した。

## IV. 倫理的配慮

本研究は、聖隷クリストファー大学研究倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した。

## V. 結果

1. **予備研究：**成人期発症1型糖尿病患者の療養体験の語りから(1)成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感をもたらす理由、(2)成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感を軽減する関わりが明らかになった。
2. **本研究：**成人期発症1型糖尿病患者9名に協働的パートナーシップの形成と、心理的負担感を軽減するための対処法の獲得に必要な支援の実践を行った。結果、看護介入プログラムにより、糖尿病に関連した心理的負担感、精神的健康状態、HbA1c 値の改善が認められた。患者は、セルフモニタリングデータを活用し、心理的負担感に対処する方法を見つけることができていた。

## VI. 考察

### 1. 予備研究

成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感をもたらす要因を軽減するために必要な支援は、(1)成人期発症1型糖尿病受容への支援、(2)成人期発症1型糖尿病の療養行動に必要な知識・技術の提供、(3)成人期発症1型糖尿病の療養生活への具体的な実施方法の提案であると考えられる。

### 2. 本研究

協働的パートナーシップによる看護介入プログラムは、成人期発症1型糖尿病患者と看護師は協力して課題に取り組み、段階的に進むことで相互理解と信頼関係を深めることができた。結果として、患者と医療者の協働的パートナーシップが有益であると示唆され、血糖コントロールにも一定の効果が示唆された。

## VII. 結論

看護介入プログラムの評価は、1)プログラムは看護師が具体的な糖尿病に関する知識を提供し、患者が療養生活に役立てることができた。2)成人期発症1型糖尿病患者の心理的負担感に焦点を当てた個別性のあるプログラムを作成できた。3)セルフモニタリングデータの活用により、看護師と患者が協力して達成可能な目標を設定できた。協働的パートナーシップ螺旋モデルを参考にしたことへの評価は、1)「患者との協働的パートナーシップの形成」が患者に負担感を表出できる機会を提供し、看護師と患者の信頼関係構築に寄与できた。2)看護師の専門的知識と患者の療養体験から得た知識が協働し、新たな患者教育プロセスを見つけることができた。プログラムを実施した患者への評価として、HbA1c 値の改善がみられたことから、血糖コントロールに効果や、心理的負担感、精神的健康状態の改善傾向もみられた。

## 論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、成人期発症 1 型糖尿病患者が、心理的負担感をもたらす理由について対処法を獲得し、心理的負担感を軽減するための「協働的パートナーシップによる看護介入プログラム」を作成し、このプログラムを成人期発症 1 型糖尿病患者に実施し、その効果を検討・評価することである。

このテーマは、研究者が、糖尿病看護認定看護師として実践する中で、成人期発症 1 型糖尿病患者の心理的負担感に問題意識を抱き、その軽減を図ることに焦点をあてた支援方法の確立を目指して取り組んだものである。

審査においては、看護介入プログラムの構成要素と予備研究の結果との整合性、患者との協働的パートナーシップという支援態度の部分と支援内容の整理、について指摘が行われ、研究者の口頭による説明とプログラム記載方法についての修正が行われた。また、作成されたプログラムを実践した内容について、個別の事例分析を実施し、介入と患者の反応を丁寧に提示したことにより、プログラムに基づいた実践が、患者が自由に負担感を表出できる機会が提供でき、看護師と患者との信頼関係構築に役立ったこと、成人期 1 型糖尿病患者を支援するにあたり、看護師の専門的知識と患者の療養体験から得た知識が、どのように用いられ、展開されたかを示し、新たな患者教育プロセスを提案することにつながったと考える。

本研究は、臨床現場で実践を行う看護師の問題意識に始まり、現場なりの取り組みの姿勢を活かしつつ、成人期発症 1 型糖尿病患者の心理的負担感を軽減するための対処法を促進する協働的パートナーシップによる看護介入プログラムを作成し、その実施結果を明示したものであり、慢性看護において意味を持つと考える。

以上の結果から、本研究は審査委員会委員全員により、本論文が研究者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。